

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5644号  
10月号  
令和2年10月1日発行  
宮崎県  
宮崎地方气象台



## 【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高くなる可能性があります。

## 【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	30	50
降水量	九州南部	40	30	30
日照時間	九州南部	30	30	40

## 【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率50%です。

3～4週目は、高い確率50%です。

### <1 週目の予報> 10月3日(土)～ 10月9日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

### <2 週目の予報> 10月10日(土)～ 10月16日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

### <3 週目から 4 週目の予報> 10月17日(土)～ 10月30日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

## 普通作物

### ◆普通期水稻

---

収穫時期は慌ただしく、一瞬の油断や操作ミスが農作業事故につながるので注意しましょう。

#### 一 適期収穫等

収穫適期は、不稔籾を除いた全籾数の8割が黄化したときです。刈り遅れると品質や食味が低下するので、ほ場ごとに籾色をよく観察し、適期収穫に努めましょう。また、収穫前の落水が早すぎると白未熟や胴割の発生を助長するので、収穫5日前の落水とします。

倒伏すると穂発芽が発生する恐れがあるので、全体の品質が低下しないよう刈り分けます。

#### 二 乾燥調整

乾燥は品質や食味に大きく影響します。高水分の生籾を高温で急激に乾燥すると胴割粒が発生しやすくなり、過乾燥になると食味が低下します。乾燥温度は40度以下で、毎時の水分減少は0.8%以下とし、仕上げの玄米水分は14.6～15.0%とします。例年過乾燥の米が多くなっているため、適正な乾燥に努めましょう。

複数の品種を扱う場合は、機械や袋等の清掃はこまめに行い、混米を防止します。

### ◆大豆

---

#### 一 排水対策等

湿害対策で排水溝を整備します。逆に干ばつの時は子実の肥大が悪くなるので、水が確保できる所では畦間に走り水を行います。

#### 二 病害虫防除

カメムシは生育後期まで莢を加害します。また、ハスモンヨトウは生育期間を通して食害します。ほ場を観察し、農薬の使用基準に従い防除します。

### ◆ソバ

---

排水対策が重要です。子実肥大期に入るので、降雨後に停滞水のあるところは追加で排水溝を設けるなど、こまめな管理は重要です。特に水田では周囲に溝を設置すると効果的です。

(荒砂 英人)

## 施設野菜

### ◆施設野菜全般

---

急な冷え込みに備え、暖房機をいつでも稼働できるよう準備し、内張ビニルの設置が終わっていないほ場では、早目に準備を行いましょう。

暖房用燃料を節減するためには、ハウス内の気密性を高めることが重要です。ハウスの外張ビニルに破損や隙間がないか確認しましょう。また、内張ビニルは谷部やサイド部分のつなぎ目に隙間ができやすくなりますので、丁寧な作業に心掛けましょう。

## ◆きゅうり

---

ハウス抑制裁培は主枝の収穫期で、側枝からの収穫も始まります。側枝の発生をよくするため、やや多目のかん水を行い、主枝の摘心が遅れないよう注意します。追肥の1回目は主枝摘心の1週間前に行い、その後側枝の果実肥大が始まる時期から定期的に施用します。側枝の収穫開始以降は、収穫の最盛期を迎えますので、草勢が低下しないよう注意しましょう。光線の透過を良くするために、主枝の摘心後は中段の葉から順次摘葉を行います。

促成栽培は育苗期の後半から定植時期となります。適期定植を行えるように、早めのほ場準備を行いましょう。

## ◆ピーマン

---

促成栽培は整枝・誘引期で、この段階での枝づくりは年内だけでなく、全期間の収量を左右しますので、注意を要します。第2分枝を主枝としますが、第3分枝が強い場合には、側枝のねん枝等を行い主枝の伸長を促します。また、着果が多く、草勢が弱い場合には、1～2番果を摘果し、草勢を維持するなど初期の樹体づくりに努めます。かん水は畦全体に十分かかるように行いますが、軟弱徒長を防止するために過度のかん水は控えます。

## ◆トマト

---

促成栽培の大玉トマト、ミニトマトは定植後、異常茎（メガネ）の発生を抑制するため、かん水量を制限していますが、大玉トマトでは、第1花房の肥大が始まる第3花房開花期、ミニトマトでは、第5花房開花期を目安にかん水、追肥を開始します。かん水開始時期が遅れると肥大不良や生理障害等の発生が懸念されるためタイミングを失わないよう注意してください。

## ◆いちご

---

7月下旬～8月下旬の高温やその後の気温低下で地域により花芽の分化状況が平年よりやや遅れています。花芽分化をしっかりと確認して定植します。一方で定植時期は平年並みの予定で、頂花房の発蕾は中旬前後と予想されます。同時期に第1次腋花房の分化期となりますので、マルチ被覆を行うとともに、追肥を開始します。

(吉山 健二)

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆食用かんしょ

---

5～6月に植え付けたものの収穫期です。食用かんしょは生育日数が130日以上になると肥大し過ぎによりいもの形や皮色が悪くなるので、適期に収穫しましょう。

### ◆さといも

---

中生種の収穫と翌年の種芋の貯蔵を始める時期です。最後まで葉の生育が良好なものを種芋としましょう。枯れ上がり症状の見られたほ場、芽つぶれ症のあるもの、親芋の底部がスポンジ状となっているもの（乾腐病の疑い）は、翌年の種芋としては使用を避けてください。

## ◆さといもやかんしょなど収穫後の片付け（次作に向けて）

---

各種病害の伝染環を絶つため、収穫が終わった畑は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し堆肥舎で腐熟させます。ほ場外に持ち出せない残さはトラクター速度を遅く、ロータリー回転を早くして、細かく破碎します。できるだけ温度が確保できる時期に残渣分解することが大切です。畑や畦畔、水路近くに残さを放棄することは決してしないでください。無発病の畑や種芋採取用の畑に入るときは、病気や線虫の伝染を防ぐため、長靴や農機具を洗浄して使いましょう。

## ◆ほうれんそう

---

加工用は厳寒期に収穫する作型の播種期です。地力の高い排水の良いほ場を選定し、播種前に、十分な根域を確保するための深耕や表面排水を促すための排水溝の整備を事前にします。また、除草剤は土壌が乾燥しすぎた状態では効果が劣るので土壌水分が適湿の状態です。

## ◆しょうが

---

低温障害を受けやすいため、降霜の前に収穫を行います。掘り上げたら、できるだけ早く茎を切り落とし、茎やシートで塊茎を覆って乾燥を防ぎましょう。

## ◆たまねぎ

---

翌春3月以降に出荷する作型の播種期です。本ぼ10aに対し、かん水が可能で、排水の良い苗床を50㎡用意し、完熟堆肥200kg、苦土石灰8kg、窒素1・8kg、リン酸2・8kg、カリ0・8kg（いずれも苗床50㎡あたり）を施用し中旬までに播種してください。播種後覆土し、十分にかん水した後は発芽まで乾燥しないよう、籾殻や新聞紙等で覆います。

（川崎 佳栄）

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆極早生温州みかん

収穫が終了した園地では、樹勢回復のため、施肥、かん水を行います。また、窒素成分主体の葉面散布は樹勢回復効果が高いため、5～7日間隔で3回以上行いましょう。

### ◆完熟きんかん

今年は、夏季の高温の影響で一部の園で落果が見られています。また、激しいす上り果の発生も懸念されます。結果数に合わせて仕上げ摘果を行いましょう。

結果中心が7月中旬以降で果実肥大が遅れている園や、夜温が早く低下する中山間地域では、上旬までにビニル被覆を行い、昼間の温度は28℃、夜間は外気温よりも3度程度高い温度を目安に加温することで、果実肥大を促進しましょう。

### ◆マンゴー

剪定が7月下旬以降の後期作型園では、新梢の発生や充実が遅れている園地が見られます。そのような園では、夜間の加温と昼間の高温管理、葉面散布により、新梢の緑化と充実を早めましょう。

近年、果実の軸腐病の発生が増加しています。ハウス内の胞子の密度を下げるため、加温が始まるまでに枯れ枝を取り除きましょう。炭そ病対策と併せて、施設内の剪定残さは全て施設の外に持ち出しましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆秋肥施用

収穫後の樹勢回復が不十分だと、翌年の新梢発生や開花・結実が悪くなります。根が活発に活動している10月末までに施肥を行いましょう。ただし、不発芽が多いナシ園では、対策として秋冬期の施肥は見送り、春肥で補うようにしましょう。

(鈴木美里)

## 花き

### ◆花き全般

---

10月に入ると夜温が徐々に低下します。特に、中山間地域では急激な夜温低下による降霜被害の恐れもあるため、施設栽培では暖房機のダクトを早めに設置しましょう。

また、このタイミングに合わせて微生物農薬のダクト散布を開始しましょう。

### ◆キク

---

秋ギク「神馬」は、10℃以下の低温に遭遇すると、幼若性の獲得により開花遅延を起こす恐れがあるため、早めに加温準備を行い、適正な温度管理に努めましょう。

また、年内出荷作型でも、親株が高温に遭遇していると、生育中の低温により開花遅延を起こす場合があることから、しっかりと保温や加温を行いましょう。

### ◆スイートピー

---

中～下旬から発蕾が始まります。株ができあがっていない状態で開花させると、草勢が著しく低下して減収の原因になることから、中旬頃までは株づくりに努め、一定の葉長に達してから着蕾・開花させるようにしましょう。

### ◆デルフィニウム

---

中山間地では本格的な収穫が始まります。かん水を過度に控えると花のボリューム低下につながることから、極端な管理は避けましょう。

平坦地では中旬頃から発蕾が始まります。ボリュームを確保するために、かん水・追肥等を適切なタイミングで行いましょう。

### ◆トルコギキョウ

---

生育初期の乾燥は活着不良につながることから、定植後しばらくは十分にかん水し、草丈が10cm前後になった頃からかん水を徐々に控えて根域の発達を促しましょう。

また、追肥が後半にずれ込むとブラッシングの発生につながるため、発蕾までの期間に適宜追肥を行いましょう。

### ◆キイチゴ「ベビーハンズ」

---

気温の低下に伴って伸長が進み、秋の本格的な収穫が始まります。樹勢の維持並びに翌年春からの萌芽促進のため、株あたり3～5本程度のシュートを残し、それ以外で出荷規格に達したものを順次収穫しましょう。

(藤原 明紀)

## 畜産

### ◆ 家畜防疫対策

---

豚では、九月二十六日に、群馬県で豚のCSF（豚熱）の五十九例目が確認され、野生イノシシでの発生も継続して確認されています。また、鶏では、鳥インフルエンザの発生リスクが高まる時期に備え、防鳥ネットに破れ等がないか、点検を実施する必要があります。これらの家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、野生動物の侵入防止対策を徹底します。

さらに、飼養衛生管理基準の改正が、牛・鶏では十月一日に施行されます。主な変更点は、①飼養衛生管理者の選任、②衛生管理区域内での愛玩動物の飼養禁止、③放牧制限の準備（避難場所の設置）等となっています。一部の項目では、準備期間が設けられていますが、大幅な変更がされていますので、内容を十分に確認してください。

### ◆ 家畜

---

今月は、朝夕と日中の寒暖差が大きい時期です。子牛、子豚、幼雛は、温度変化に特に弱いため注意が必要です。適切な温度管理と換気を行います。

3ヶ月齢までの子牛は寒さに弱く、腹部が濡れた状態のままだと風邪や下痢などの疾病を発症しやすくなりますので、敷料をこまめに取り替え、床を乾燥した状態に保つようにします。

### ◆ 飼料作物

---

飼料用イネの普通期栽培では、収穫時期となります。収穫適期である糊熟期から黄熟期で収穫を行い、適正水分でサイレージ調製をします。乾かし過ぎるとサイレージの品質低下につながりますので、注意しましょう。また、イタリアンライグラスやエンバク等の播種時期となります。播種前には土壌分析を行い、適切な肥培管理を行います。

(大山 佐喜子)

## 工芸作物

### ◆ 茶

---

#### 一 秋整枝の実施

秋整枝は、春整枝に比べて芽揃いが良く摘採が三日程早くなる反面、十二月～三月の凍霜害を受けやすいため、防霜施設の有無等茶園の立地条件と品種の早晩生等を考慮して実施します。

①秋整枝は、平均気温が十八度以下となる頃を目安に行います。山間地域は十月上旬、広域霧島地域は十月中旬、沿海地域は十月下旬頃となります。

近年、秋冬期の高温で秋整枝後に再萌芽する事例が見られますが、三十 cm 四方内の再萌芽数が二十芽以下であれば、収量・品質への影響は無視できます。一方、秋整枝の遅れによる越冬芽の充実不足は、収量・品質に影響が出てくるため適期を逃さないよう注意します。

②整枝の高さ

整枝の高さは、最終摘採・整枝面から三～五節上で、葉層を八 cm 以上確保できる位置で実施します。また、秋と春の二回に分けて整枝する場合は、秋整枝は春整枝より一～二節高い位置で実施します。

## 二 病害虫の防除

裾刈りを行う際は、チャトゲコナジラミ発生地域では、成虫飛来が終息後にやや深めに刈り落とします。更に、冬期防除（マシン油）を行うことで、チャトゲコナジラミとカンザワハダニの越冬密度低減を図ります。なお、チャトゲコナジラミに対する問い合わせについては、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

（松尾 啓史）

## ◆しいたけ

### 1 水分管理と環境整備

九～十月中旬は、しいたけの基となる原基の形成が盛んな時期です。水分を多く含んだほだ木は丈夫な原基をたくさん作り、しいたけの発生量に大きく影響しますので、ほだ木への積極的な散水に努めます。

また、しいたけ発生量の増大や品質向上のため、暗くなったほだ場は、間伐や枝打ちを行い、光や降雨の入りやすい明るい環境にするとともに、風が強く乾燥しやすいほだ場は、防風ネットの設置等環境改善を行い、ほだ起こしや秋子の発生に備えます。

### 2 原木の伐採

クヌギやコナラは、通常十月下旬～十一月下旬の間で、葉が三～七割程度黄葉する時期に伐採するのが適期とされていますが、同じ地域でも、その年の気象条件や立地条件（日照、標高等）によって伐採の適期が変わります。気象や原木の状況等に注意しながら、伐採に向けた準備を始めます。

（古澤 英生）

## ◆たばこ

本年の葉たばこの販売も今月中旬で終了となります。これから販売される方は出荷するまで、適切な貯蔵管理を行うようお願いします。今月は、来年作に向けての準備が主な作業となります。

一 品質・収量の安定のために、最も重要なポイントである日当たり・風通し・排水・肥切れなど、条件の良いほ地を早期に選定します。

本年の販売においても、ほ地条件による品質・収量の低下の事例がみられます。新作地や借地は、事前に前作物の情報収集と土壌検定を実施し、来年作の施肥設計の参考にします。

二 冬期深耕および耕耘作業は、土壌環境改善と病原菌密度低下のための重要な作業です。深耕・耕耘を繰り返し行い、耕種的防除に努めます。

三 良質堆肥十アール当一二〇〇kg以上の使用に向けて、堆肥材料を確保しましょう。未熟堆肥などは、I型グレーの生出原因となりますので、脱塩処理を行います。また、切り返しは適度な水分状態（六〇%前後）を保ちながら、月一回程度の切り返しを行い、腐熟促進に努めます。

四 出荷後は、来年の出荷規格遵守に向けて貯蔵庫・作業場の整理整頓および清掃を行います。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 内容の詳細について

---

10月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## 向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発 生 状 況 と 防 除 対 策
野菜・花き類	ハスモンヨトウ等 チョウ目害虫	少	大豆やさつまいものほ場では平年より少なく、フェロモントラップ調査でも、平年より少なく推移しています。幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。
施設野菜全般	土壌病害虫	—	台風等による大雨でほ場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあります。排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行います。
トマト・ミニトマト	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	—	TYLCVとCCYVはタバココナジラミ、MYSVはミナミキイロアザミウマによって媒介されるので、施設開口部には必ず防虫ネット(目合い0.4mm以下)を設置し、侵入を防止します。これらの微小害虫は、一旦増加すると防除が難しいので、発生初期の防除が重要です。 また、発病株は伝染源になるので、必ず抜き取り、ほ場外に持ち出します。
ウリ類	黄化えそ病(MYSV) キュウリ・メロン 退緑黄化病(CCYV)	— —	
ピーマン	ヒラズハナアザミウマ	—	近年、発生量が多い状況が続いています。本虫は花の内部に生息するため、多発してからの薬剤防除は非常に困難です。本虫は青色粘着板による誘殺が効果的であるため、樹冠部付近へ10a当たり300～500枚の設置を推奨します。 ※なお、青色粘着板には、天敵カスミカメ類も誘殺される可能性がありますので、カスミカメの導入ハウスへの設置は避けてください。
いちご	炭疽病、萎黄病 その他の病害虫	— —	苗床で炭疽病、萎黄病が発病した場合は、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分します。また、定植初期からうどんこ病やハダニ類が発生するとその後の多発につながるため、定植前に苗の防除を徹底し、本ほ場に病害虫を持ち込まないよう注意します。
果樹全般	果樹カメムシ類	やや少	チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシともに誘殺数は、平年より少ない～やや多です。地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。
カンキツ類 (露地栽培)	黒点病 ミカンハダニ	やや少 やや少	黒点病は感染源である樹冠内枯れ枝の除去に努めるとともに、降水量が少なくても1ヶ月毎の防除を行います。 生息密度が高くなってからでは防除効果が期待できないので、発生初期(寄生葉率30%、または1葉当り虫数0.5～1頭)に防除します。 収穫前の早生みかん等では、農薬の収穫前使用日数に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや多	防除適期は越冬前の10月中下旬ですが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断します。 同一系統薬剤の連用を避け、抵抗性の発達防止に留意します。
	クワシロカイガラムシ	並	薬剤散布量は成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布します。
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<a href="http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki">http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki</a> </p> <p>です。</p>			